
御菓子屋妙前

yokomiti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御菓子屋妙前

【Nコード】

N3267Z

【作者名】

yokomiti

【あらすじ】

御菓子屋妙前でおきる奇妙な物語

他サイトでも掲載しております

プロローグ

ピピピピ・・・、ピピピピ・・・。
聞きなれた目覚まし時計のアラーム音によって私の睡眠状態であ
った脳は段々と覚醒させられていく。

おはようございます。

私は頭の中で一人挨拶をした。勿論それに返す言葉は無い。当た
り前か、頭の中で挨拶をしたのだから・・・。

私は、まぶたを開けようと試みた。まぶたからの抵抗を強く受け
ながらも私は目を薄く開ける。カーテン越しにも関わらずサンサン
と太陽の光が差し込んでくる。

まぶしい・・・。

どうやら、太陽なるものは私の敵であるようだ。それほど私の目
を焦がしたいか、よろしいならば戦争だ。と、なんらどうでも良い
事を考えながら壁にかけてあるはずの時計を探し時間を確認する。

7:30か。起きている時間帯を見て思う。パティシエとしてこ
の小学生の投稿時間帯に起床しているのはどうかと思う。しかし、
長年この生活リズムで生きてきたのだからいきなり崩すとかなり問
題が出る。私の身体的に

ふむ、寝起きなので何も食べなくても良いはずなのだが腹の具合
を確認してみるとどうやらお腹が空いているようだ。接客している
ときに腹がなられても困るし何かしら食べる事にしよう。

私は起き、布団を片付けて何か食べる物が無いか確認するべく冷
蔵庫へと向かう。

冷蔵庫を開けてみた。

ふむ、見事に何も入ってないな。どうするか。別に一食くらい抜
いたとしても仕事にはなんら差し支えないだろう。

私は寝巻きから私服へと着替え洗面所で顔を洗う。薄いながらも
生えてくる髭を剃りながら思った。意外と女っぽいな。

私は支度を終え、今日の予定を考える。いつもどおり昼の少し後に開店で良いだろう。午後三時にちょうど良く食べられるようにと私からの配慮である。昨日のうちに下ごしらえも済んである。完璧のほずだ。

それにしても今日は暑い。確か今日は9月の半ばのはずそろそろ残暑を抜けても良い頃のはずだ。しかし、外では未だセミが元気よく鳴いていた。うつつうしい。そう思いながら寝るときに充電器に刺しておいた携帯を手取る。この携帯に何か電話がかかってくるという事は滅多に無いのだが、それでも持っていないとどこか不安定な感じになる。携帯を持っていないと情緒不安定……この女子高校生だ。いや、私は高校生と言えるほど若くは無い。そういったのは現役女子高校生である野々村^の野乃の役割だ。

私がふと携帯を開けてみると驚くべき事実がそこにあつた。私には基本的にメールなどする友人などがいない。故にこの携帯が使われるとするとそれは大概が菓子作りの予約のための電話という事になる。なので朝起きて携帯を確認したら十数件のメールが来ていたということそれは大変驚くべき事である。しかし、受信ボックスを開けてみるとその驚きは納得へと変わった。

「ああ、野々村からか……。しかし何であいつは朝っぱらからこんなにもメールをよこしてるんだ」

試しに一つ一番初めに来ていたメールをチェックしてみる。

「おはようございます……。？ まだこの時四時半だぞ」

残りのメールも大体似たような内容が書かれていた野の村の起床時間に激しく疑問を浮かべながらも時間を確認するともういい加減良い時間だったのでその携帯をポケットにねじ込むと仕事場へと向かった。

そう、御菓子屋妙前へと……

1話

0

さて、お菓子作りに精を出しますかね。by私

1 私

私の目の前には今たくさん数の道具が並んでいる。それら一つ一つに道具以上としての価値は無いがこれらの道具はお菓子を作るうえで非常に大切な商売道具である。この御菓子屋妙前は和洋中から様々なお菓子を取り扱っておりそれらを作る上で必要なものがほとんどだ。これ一つ一つをお菓子を全く作らないという人に渡してみるとまさしく豚に真珠、猫に小判。数々のことわざどおりに使いこなすどころか使い方すら分らないものがほとんどであろう。とまあ長々と今私が使っているものの説明を試みたのだが、まあ知らなくても良いようなものばかりだ。

ふと、時間が気になり時計を確かめる。良かったまだ十一時だもう少し時間がある。私が経営している店『妙前』は午後の三時、いわゆるおやつ時間帯がいわゆる開店の目安である。これは私が店を始めた当初から心がけている事で、その珍しさからか何故かその事が反響を呼びこの妙前は結構な有名店となっていた。

この御菓子屋妙前は私が、三年前にイタリアでのパティシエの修行を終え日本へと帰国した際せつかくなので自分の店を持つと思い立ち創設した年期の浅い店である。年期の浅い店であるからして働くこととするものが少なく、というよりいないので一年は一人で頑張っていたのだが、予想以上に大変だったためバイト募集を出した所ちようどたまたまそれに来た野乃村が今妙前で働いている唯一のバイトさんである。

そうこうしているうちに予約が新たに入った分のスポンジが焼けたようだった。私はそれを丁寧に取り出すと長年の修行にて培った技術を使いサツとそれにクリームを塗りたくる。

一息つくると予想以上に自分の額に汗粒が浮かんでいた。まさか商品に汗を吹っかけるわけにも行かないので俺はその場を離れ持ってきていたハンカチタオルで汗を拭う。

予想以上の暑さに参りそうになっていたので少し休憩する事にした。作業着を脱ぎ、この店の近くに設置されている自動販売機から一本お茶を買う。本当はスーパーまで行って少しでも節約しようかと思ったのだがそこまでの時間は無かった。

私はその買ったお茶を片手に持ち落ち着いて飲めてかつ、木陰になつている所が無いか探し始めた。ちなみに妙前と私の自宅の距離はそう遠くは無いがそこそこある。お茶を飲むためにわざわざ家に帰るといふ考えは浮かばなかった。そうして数分ほど歩いているとちょうど良い感じの公園が目に入った。

私はそこへとりあえず行ってみようと思いついてみると予想通り大きな木がありその傍らにはその気の影に隠れるようにちいさなベンチが置いてあった。

今の時間帯はちょうどお昼を過ぎた辺りなのでいつも騒いでいる子供はいなかった。さすがにお母さん連れの子はいるかと思つたが入っ子一人おらず、弱弱い風にブランコがさびしそうにゆれていた。

「そうか、今の時代外で遊ぶ子供は少ないのか……」

私は一人今気づいた大変な事実を口にする。そういえば最近ゲームという物が普及されていて外で遊ぶ子供はめっきり減り室内で遊ぶ子供が増えているという物を聞いたことがある。それは、最近増えている生活習慣病の促進を促しているのではないか？ふと、疑問に思つた。いや、疑問にするほどのものでもないのか……これが時代の流れというものなのだ。そう自身で結論付ける。

ベンチに座り買ってきたお茶に口をつけると、先ほどまで暑苦しいせいでじめじめしていて干からびかけた身体が少しだけだが蘇るようなすがすがしい気持ちが出た。

よく、世間のくたびれた親父殿たちが仕事帰りにビールを飲んで生き返るといつているがあれと同じようなものだろう。ただ、自分のには若いつもりは無いがまだ年を食っているつもりも無いのでこの気持ちができることが親父っぽく思えることが少し嫌だった。

ふと、飲んでいたペットボトルを口からはずし、隣の本を何とは無しに見てみるとちょうど視線の高さにセミがいた。頑張っ自分存在を訴えかけようと必死にわめいている。

自分はこのセミが嫌いだ。秋に良く鳴く鈴虫やこおろぎ達と比べてみると良いまるで月とスッポンだ。秋の風情を高めてくれる鈴虫やこおろぎと違ってセミは夏の暑さを嫌という程思い出させてくれる。すこし、というかほとんどが自分の偏見だが個人が持つ感想なんてそんなものだろうと気にしないで置く。

それからしばらく木陰で涼む。この暑さの中そよそよとうごめく風と影のお蔭で私はウトウトと眠りこけそうだった。しかし、店主がまさかの寝坊をするわけにはいかないので眠らないようにこらえる。

「まずい。これは本格的に眠りそうだ」

私が持っているお茶のペットボトルに目をやると、まだ半分ほど残っているようだった。

公園の時計を見るとあと少しで自分が帰るには良い時間となっていた。なので私はその場で眠るわけにもいかなかったので妙前へと帰る事にした。

店まで戻った私は開店のために急ピッチで作業を進めていた。この時間帯野々村はまだ学校にいたので妙前を一人で切り盛りしなくては行けないのだ。以前野々村がいたときに常務的に入ってくれるパートの募集を出そうかななどと言った所何故か野々村が涙目になつて止めてきたので今のところは募集をしていないがこれは考えなくてはいけない。

今私が行っている作業は今日作ったお菓子を店頭に並べるといっただけの物なのだがいかんせん量が多かった。予想以上の時間を食ってしまった

やつとの事で品物を全て出し終え、私は先ほど買っておいたお茶の残りを一気に飲み干す。冷蔵庫の中で冷やてあったのでほてった身体を一気に冷ましてくれた。

「ふう……」これまでの作業に思わず溜息が出てしまう。壁がけの時計を確認する「よかった。間に合った……」

私は店を開けようと思い、店の暖簾のれんを持ち店の入り口を開ける。京都での御菓子屋という物には私は横開きのドアのイメージがあったので横開きのドアである。カラカラと音を立てながら開かれる事も風情があつてよい。と常連さんからも好評だ。私もそこらへんはグッドポイントだと思っている。

「おや、こんにちわ。今日も早いですね」

私は外に出、いつもどおりそこに座っていたこの店の常連さん一号に挨拶をする。するといつもどおり「ウム」と言つて私が暖簾をかけるのを見ている。

彼女は菓子かし好きこのみさん。その名の通りお菓子が大好きな人である。今年で22歳を迎えたそうでその時は妙前店主である私が他の常連さん達と一緒に全力を持って祝わさせていただきました。

「今日は何をお求めで？」

私は好さんに尋ねる。すると、ウム、と考え込んでしまった。

長い黒髪をこさえた彼女が少しだけ顔を傾けて悩む姿は大変目に優

しいものだった。眼福眼福。これだけで今日一日頑張れる気がします。

好みさんは少しの間考えていたが何もいわずただ首を振って答えた。どうやら特に理由無くここに来たようだった。

すると彼女はなにやら満足したようでも持っているギターケースを持ちこの場を離れようとしていた。彼女が誕生日で私の家に来たときに職業はなにかと聞いたところ「秘密……。」と言われただけで明らかにならなかった。私はいつもギターケースを持っているのでミュージシャンか何かかと思ったがどうやら違うようだった。

「ちょ、ちょっと待ってください。せっかいですから時間がありますしたら上がっていきませんか？ 金唾くらいならサービスしますよ」
私はせっかく来てくれた常連さんなのに何もせずに帰ってしまつては悪いと思ひ呼び止めた。すると、彼女は良いの？とでも聞くように首を傾げる。ああ、癒し系だ。彼女は猫のように人を癒す能力を持っているのかもしれない。

「いいですよ、せっかく来ていただいたのですし。いつもご贖いただいてはいるお礼です」
私は接客スマイルではない笑みを彼女に向ける。彼女とは既に店主と客ではなく普通にお友達な関係である。ここで接客スマイルなど出したら失礼だ。

私はどうぞこちらへと言わんばかりに入り口に片手を向け彼女を招き入れる。そしてレジの近くにある、ちいさな椅子に座る。すると、彼女の長い髪の毛が床に着きそうだった。ついさっき床を大変な思いをして拭いていたことに感謝した。何気ない今日はいわゆる要人の方が見えるという事で少しでも綺麗に見せ様と床を拭いていたのだがそれがこんな所でも功をきしたようだった。彼女のあの綺麗な黒髪が汚い床などについてしまったらそれこそ私は彼女に華麗なる土下座をして許しを得るしかないだろう。まあ、そんな事になったら彼女は困惑するだけなので実際にはやらないが……

彼女はそこに座ると人の家の子供のようにあたりをキョロキョロし始める。これは毎回思うことだが何の意味があるのだろうか。当然のことながら彼女は常連であるのでこの店に来る事は初めてではない。しかも他の常連さんたちに比べ早くに常連となっていたので一番この店に来ていてる客と言えば彼女なのである。店の間取りも滅多に変えないので真新しい事などあるはずも無いはずだ。彼女の視線をたどってみるが分るはずも無い。

まあ、良いか。それよりも金唾だ。他のお客さんたちもまだ来ていないようだし。こういうサービスは誰もいないときにするに限る。私はそのまま彼女を店の中に置き部屋の奥へと進む。そしてそこにある冷蔵庫を開けて作りおきしておいた金唾を一つ手に取った。これは元々野々村が食べたいとうるさく言ってきたので作った物なのだが、今は好さん優先だ。私は更に金唾を食べるための楊枝を取り店内へと戻る。ここでは、先ほどと同じく椅子に座ったままの好さんがいた。

「お待たせしました」

私は彼女に声をかける。どうやら彼女は私に気づいていなかったようで、ビクツとしてこちらを振り向いた。

「どうぞ」私は手に持っていた金唾を彼女に渡してあげる。彼女は受取るとフムフムという擬音が聞こえてきそうな食べ方で金唾を食べていった。

3 小久保官房長官

さて、先ほどまで順調に仕事をこなしていったわけだが、問題はこれからである。時刻をみるともうすぐ5時そろそろのはずだ。

普段なら、さして緊張感もなく終わるこの仕事であったが今日は勝手が違っていた。

これから来るであろうお客様は、今この日本の指揮を執っている慈善総理の官房長官を務める小久保という人物なのだ。この小久保

と呼ばれる人物、どうやら風の噂とやらで私の店の評判を聞きつけたらしく、つい三日ほど前に一つの予約が入った。どうやら、この小久保官房長官は無類の甘党であるらしく是非私の店のショートケーキを食べたいと言う事でホールでの注文が入った。一人でどれだけ食うのだろうか。太るぞ？ いや、既にあの人は太っていたか。その為に今日バイトがあるはずの野々村には少しばかり遅れて店に来るようにと言っておいた。何かのミスで私の信用が下がってしまったては冗談ではない。

「ふう」つつい溜息が漏れてしまう。こんなにも緊張するのは何時依頼だろうか。私は万全を期す為に接客マニュアルを頭の中で復唱していた。

そうしたまま無碍にも時間は流れ、時計の針が一秒を刻むことに私の胃もキリリという音を立ててしまっていた。

そしてついに、目の前に一つの縦長い車が到着した。いち早く運転手が降り後部座席の左側の扉を開ける。そして小久保官房長官がその姿を現した。

その姿に私は絶句をするという表現がぴったり当てはまる位に声が出なかった。野々村から聞いていたこともあり、小久保官房長官はかなり体系がふくよかであると知ってはいたのだがこれはこれは、どうした事か正直想像以上であった。

私はそのまま店内のレジにて相手がその横開きの扉を開けるのを待つ。

カラカラカラという風情溢れる音を立てて開かれた扉から最初に現れたのはSPと思われる方だった。そのSPと思われる方が二人店に入った後小久保官房長官がこの店内に足を踏み入れた。そしてノシノシという言葉と共に私がいるレジの前まで歩いてくる。小久保官房長官が入った後新たにSPの方が二人現れた。この店内にいるSPの方の数はこれで四人だ。

「ようこそいらつしやいました。小久保官房長官殿」私は一番無難だと思われる挨拶をした。

「うむ、ここが妙前という店か、中々風情があつてよいではないか」「お褒めいただきまことにありがとうございます」

「よいよい、では頼んでいたものだけをいただけるかな?」

「はい、ただいま」そういうと私はケーキを持ってくるべく颯爽と奥へと消える。話している間中思っていたことだが小久保官房長官よりも回りのSPの方々の視線が痛すぎる。根が小心者である私は胃に大ダメージを食らってしまった。奥にいる隙に私は胃薬を飲む事に決めた。

私は、奥へとやってくるかと先ず最初にホールケーキを探す事ではなく胃薬を探す事にした。確かこの奥の部屋に来て直ぐの棚に入っていたはずだ。この奥の部屋というのは厨房の事ではなくよく従業員が使うような簡単な事務室的な部屋である。

かくして私の目的物である胃薬は何なく見つかった。それと同時に気づけの薬も見つかったので同じく服用しておく事にする。これで行くらかは持つはずだ。

さてお次はメインディッシュである。ホールケーキである。これは今朝作り上げていたものである。盗まれるという事が無いよう冷蔵庫に厳重にしまっておいた。よし、問題なく置いてあるな

「こちらでございます。小久保官房長官殿」そう言つて私は手に持っていたホールケーキの入った箱を官房長官に手渡す。

「ありがとう。こちらは代金だ。少しばかり多いがこれから長く付き合う上での気持ちだと受取つて欲しい」

そういつて官房長官は私に本来の代金とは少しばかりというかなり多い代金を私に渡す。これはアレだろうか賄賂とかい奴なのだろうか。こういう事ははじめてであったのでどうすればよいのか。……。といった感じに私が多めの代金に戸惑っていると

官房長官は大きな声で笑い出した。

「ハツハツハツハ、君は実に面白いお方だなあ。大丈夫だ、これは受取ってくれてかまわないよ。また、ここに顔を出すかもしれないからその時はよろしく頼む」官房長官はそのまま笑いながら着た道を戻っていった。

お付きのSPさんの話によるとあの小久保官房長官は気に入った御菓子屋があると初めての時はああやって元とは多めに支払うそう。そうやって常連となっていくきっかけを作っているのだという。そこまで聞いてなるほどと私はおもった。確かにお金を握らせておけば自らのことを無碍に扱ったりはしないだろうしこれからはお得意様としてその店からは認識されるだろう。それを為せるのはあの人。今官房長官という高位な地位についている事とその財布の底が底なし沼のお蔭だろう。要するにお金をあげるから友達になつておくれと、いう事か。

まあ、私の店の中々ユニークな常連さんたちがたくさんいるからその中に官房長官、国のトップに近い人が常連になつても大丈夫だろう。私は最後にとりあえずこれからもご贖いよろしく願います。と言っておいた。

小久保官房長官がお帰りになつてから私はしばらく一般のお客の相手をしていてふと、時計を確認する。

「そろそろ、野々村 野乃が来る時間だな」

これで少しは私の仕事の負担がなくなるだろうそう思い、野々村よ早く来いそう願った。

4 野々村 野乃

とにもかくにも時間という物はあっさり過ぎていつてしまうもので今朝から今日は要人のお客があると言う事で胃をキリキリとならしながら痛めていたのに、存外その時が来てしまえばあっさりと難

なく過ぎ去ってしまうものである。いわゆるやるしかないという状況下によってそれは起こりうる。そしてそれが過ぎ去ってしまうえばこれから起こるあらゆる事に対してもそれ相応の気構えが出来るという事である。

何故私が今数人しか店内にいない状況でそんな事を考えているのかと言うとそれ相応の気構えが出来てしまった事でこれから来るであろう可愛らしいバイトさんのことを思うとあんなプレッシャーに耐えられるのだろうかという、すこしばかりありがたい迷惑的な彼女の将来への不安をふつふつと覚えるからである。今日、彼女には少しばかり小久保さんが来るということとバイトの時間をずらしてもらったが実際はプレッシャーに慣れさせるという意味ではいてもらったほうが良かったかもしれない。今思っても既に後の祭りではないのだが。

「こんばんわー。店主さん」

おっ、来たな？先ほどの声の家でバイトしている唯一の存在野々村野乃である。バイトである彼女であるが路地裏にある裏口から入れるというようなことをする事も無く普通にお客さんと同じドアから入ってきてもらっている。女性が一人路地裏とか危険だし。

「おや、ののちゃん。今日は少し遅いんだねえ」

「ええ、ちよつと店主が今日は大事なお客さんが来るとかいうのでちよつと時間をずらしたんですよ」

何をやっているのだろうか普通にこの店は扉を開けたら即店内なので今彼女が他のおきやくさんと喋っているのが丸分りなのだが。喋るのが悪いというわけではないのだが一応仕事場に来たのだからそれなりの節度は守ってもらいたいものだ。

「野々村、お喋りはそこらへんにして奥で着替えてきてください」

私のその言葉に野々村は「はい」と可愛らしく返事をするとなつたと店の奥へと歩いていった。

「ほっほっほ、店主さんも勘弁してやってくださいよ。私みたいな

老人には彼女みたいな子はまさに宝なんですから」

先ほどまで野々村と話していた老人が今度は私へと話しかける。いえ、まあそれは分ってるんですけどねこちらにも雇っている側としての責任がですな……。

「ほっほっほっほ……。」

野々村野乃、血液型O型。身長158cm、体重??km。彼女はこここの近所にあるT高校に通っている現役女子高生。部活はやっておらず趣味もとくに分らない。

彼女はそこそこに長く黒い髪の毛とそのちいさな顔に掛けられている、大きなめがねが特徴的な可愛い娘だ。先ほどの老人との会話からも分るとおり彼女にはこの店のマスコットの存在として活躍してもらっている。彼氏はいないそうだ。彼女は可愛いので彼氏の一人や二人いてもおかしくは無いのだが。

「あー！ーっ！ー！」

私が脳内で野々村の軽いプロフィールを紹介している時に奥にいる、野々村の悲鳴が聞こえた。どうした？ゴキブリでも出たか！？一応綺麗にはしているはずなのだが……。

「どうしたんだい！？」

その野々村に反応したと思われる野々村目当てで毎日来ているこの老人が大きな声をあげる。そのままの勢いで店の奥に入ってしまったいそうなので私はそれを押しとどめ億で何があつたのか確かめるべく野の村の元へと向かう。

「おーい、どうしたんだー？」

私は少々けだるげな声を出しつつ部屋の奥へと向かう。店主である私がレジを離れるなど本来はありえないことなのだが、この店ではこういった事は良くある事なのでお客さん達は慣れっ子である。いや、それはそれでどうかと思うのだが。いや今回にいたってはありがたいことなのでそのご好意に甘えるでしょう。

私は無機質な廊下を一人歩き野々村のいる奥部屋へと向かう。

「店主さん。私が頼んでおいた金唾が無いの〜」

私が奥部屋につくと冷蔵庫を開けてその前で女の子座りをしながら目の端に涙を浮かべている。その道の人が見れば萌え〜などと叫びたくなるような様子ではあるが私にはその気は無いのであまり意味は無い。

それにしても金唾？ はて、何の事だったか………。私は今日は昼時におにぎりを食べただけで金唾などは食べていないはずなのだが……。

「私は知らないな。まあ、あとで金唾なんていくらでも作ってあげますから。今はバイトを頑張ってください」

言つと野々村はで頬を膨らませてブーと唸った後、そのまま作業着に着替えようとするので私は無言でその部屋を出て行った。

「ああ、そういえば。好さんに金唾を差し上げたのでした」

そして私は店へ戻っている間に何故金唾がなくなっていたか思い出した。しかし、これを言つと後々面倒な事になりそうなのは目に見えているので野々村には黙っている事にした。

2話

0

野々村 野乃17歳！ 今日もバイト頑張ります！！by野々村

1

さてさて、今日は天気もよく晴れ渡り小鳥のさえずりがよく聞こえるという絶好の日向ぼっこ日和である。風も無くちょうど良い。まあ少しばかり気温が高い気がするもそれほどではないので許容範囲である。

本日はいわゆる土曜日。世の高校生ならば部活が無い限り、朝早くからバイトにいそしみ絶好の稼ぎ時でもある。

そして我が妙前に勤めている。現役女子高生である野々村野乃もそれに該当するのである。それが何故だろうか……

「すー、すー……」

何故、この女は奥部屋でお眠りになつてのだろうか。バイトをしにきたのではなかったのか……

はあ、全く。それにしても心地よさそうに寝ていますね。しようがない。

私はこの棚には少しホコリっぽい毛布が入っていた事を思い出した。風邪でも引いてしまったら大変なので掛けてあげようと思つたが、今日の天候を思い出し風邪をひく事は無いかと思ひ直し毛布をかけてあげるのをやめた。かけてしまったら逆に汗で風邪を引いてしまつかもしれない、それにいまどきの女子高生が汗をかいたままにいるというのも本人にとっては抵抗感があることでしょう。私は彼女をそのままにして仕事場へと戻ることにした。

「ありがとうございます」

私はさくさくと仕事をこなしていた。このようにさくさく物事を進められると言う事は良いことだ。野々村も、常連さんたちもいなかったこの妙前を建てた始めの辺りのことを思い出していた。あの時は失敗ばかりで全て思考錯誤の繰り返しだった。当時の事を思い出して私は一人遠い目をしていた。人に見られていたら変な人だと思われるかもしれないが今店内には人はいないので大丈夫だ。

そんな時横開きのドアがカラカラという音を立てて開かれた。新たなお客様が来たようだった。「いらっしやいませー」私はとりあえず、その客を迎え入れる。

おおっ、そこから特徴的な黒髪を揺らし現れたのは菓子好きさんであった。私は時刻を確認するために時計を見る。だいたい十二時三十分。ちなみに私の店は午後の三時を目安に開店をしているのだがそれは平日の話、休日はバイト側が稼ぎ時なのと同じように経営側もかきいれ時なのだ。今日は朝の十時からあけている。

そして扉から現れた好さんを見て私は珍しいそう思った。好さんはいつもこの店に来るときは開店と同時にこの店へと訪れるのである。それは平日の時であるうと、休日の時であるうと同じ事だった。好さんは店の中に入ってくるといつものようにギターケースを持ちながらスタスタと音を立てずに歩き彼女専用となっている丸椅子へと座る。

「いらっしやいませ好さん。開店と同時にじゃないときに来るなんて珍しいですね。今日はお仕事おやすみですか？」

私は現れた癒し系の常連さん第一号である好さんに尋ねる。すると好さんはしばらく私の顔を見詰めた後コクリとうなずいた。

「本日はなにをお求めで？」

彼女は席を立ち部屋のあるいっぺんまで歩いていくとそこから一つお菓子を取りレジの方へと持ってきた。見るとそれは、どう

やらマドレーヌのようだった。私はそれを受取りレジにこのマドレーヌの値段である120円を打ち込む、そして彼女はギターケースに備え付けられているポケットから……今日の彼女の服装は白いTシャツにジーンズ、そして黒髪はポニーテールでまとめているともラフな格好だ……彼女らしい猫の顔をかたどったお財布を取り出した。そこから120円取り出すと私に手渡す。私はそれを受取ると、持っていたマドレーヌを彼女に渡した。そして彼女は去ろうとする。

「あつちよつと待つてください」私はそういつて彼女を呼び止める。と店の売り物であるお茶を一つ手に取り彼女へと渡した。

「おまけです。どうぞ持つていってください。それとよければ奥部屋にこられませんか？ 野々村もいますよ。眠っていますか……」

私がそう彼女に話しかけると顔をパア！と花のように咲かせる。彼女と野々村は何故か仲良しなのだ、どこらへんに仲良くなる要素があつたのか分からないのだが本人達はそれでよしとしているのでたいした問題でもないのだろう。

彼女はコクリとうなずくとそのまま店の奥へと歩いていった。そのままとめてあるポニーをフリフリと揺らしながら歩いていくその様子を見ていると、眠っている野々村に触発されてそのまま眠ってしまう彼女の姿が容易に想像できた。

2

突然、店にかけてある時計から可愛らしい旋律が流れ出した。実はこの時計あらかじめ時間を設定して置くとその時間に合わせて音を鳴らし時間を教えてくれるという優れものなのだ。昨日仕事を終えたあと近くの某値段均一のお店に立ち寄っていた所この店の内装にマッチした時計を見つけたのだ。それをこうして本日からつけているのだが時計が時間を鳴らしてくれるという機能は本当に便利だ。

この店妙前では前述の通り朝の十時よりあけている。そして私になるように設定した時間は一時半好さんが来てから一時間後だ。すると、バイトが少ないこの店ではフルで私か野々村が店番として出なくてはいけないのだが、そうするとお昼が食べられないのである。なので、私は休日には一旦中休みとして一時半から四十五分間店を閉め休憩の時間としているのだ。ちょうど良く今の時間店内に客が一人もいなかったなので私は店の扉にcloseと書かれたプレートをかけると店の奥へと向かった。

「はあ〜」思わず溜息をついてしまう。今私の目の前にある現状を見たら誰もが溜息をついてしまっただろう。つかない人は何やら特別な性癖を持っているに違いない。何をしているのだろうかこの二人は……………。

朝この部屋では野々村が眠っていた。それは良い、それは良いが今私の目の前では野々村のほかにも好さんも眠っていたのであった。そして野々村、彼女は眠り始めてから一回もおきていないのだろうか……………いや、今まで仕事場に来なかったのだから眠っていたという事が普通の事であるのだが。さすがに眠りすぎじゃないか。となりで姉妹のように眠りこけている好さんは……………。可愛い、眼福ものだ。好さんの寝顔なんてかなりレアなものだ。私が携帯を使いこなせない事が非常に残念だ。使いこなせたのならこの寝顔を写真にとって待ち受けとやらにするのに……………。

「二人ともお昼にするからおきてください」
とりあえず私は二人を起こす事にした。すると野々村は目をこすりながら、いつもかけている眼鏡ははずしてあった。半開きの眼でこちらを見てくる。隣の好さんも似たような感じだ。

「おはようございます。店主さん」（こくり）

「おはよう」

「うおっ、いつの間に好さんは来ていたのですか!？」

野々村は本当に今まで眠っていたようで好の存在に今気づいたよ

うだった。

「というより野々村さん、今まで仕事ほったらかしで眠っているとは良いご身分ですね」

私が少しばかり怒りを込めてそういうと野々村はハツとした表情を作り目に涙をためながらごめんなさいと言ってくる。そんな野々村を見ていると起こる気が消え去ってしまうのだった。

「しょうがないですね。後半戦は頑張ってくださいよ。これからお昼です」

私がそう言うと彼女は顔をほころばせてありがとうございます。というを持ってきていたバッグから彼女のサイズにあった小さめのお弁当箱を取り出した。そしてそれを傍らで好さんが見ている。

「ああ、好さんはマドレーヌしかありませんでしたね。男料理でよろしければ私のと一緒に食べませんか？」

彼女はそれを聞くと小首をかしげる。言葉に刷るならいいの？と聞いた所だろう。

「いいですよ。ご飯というものは大勢で食べたほうがおいしいものです」

「そういえばですね。店主」

野々村が口に食べ物詰り込みながら私に話しかける。はい何でしょう。どうでも良いことですが食べるか話すかのどちらかにしてください。その行動は女子高生としてあるまじき行動です。

「ゴクン。あのですね、クラスの友達と話していたときにちょうど店主の話になりました」

私の注意を聞いて野々村は一旦食べていたものを全て飲み込むと話の概要を話し始める。ふむふむ、何故お友達との会話の中で私の話題になるのか疑問ではありますが。まあいいでしょう。

「あっ、ちなみにその時はバイトの話をしていたんですよ」
なるほどね。

「で、その時に私が店主の事を褒めちぎっていたら、私と店主の関

係を聞かれました」

私は箸で掴んでいたちくわ部を食べると後は全部食べて良いよという意味を込めて隣で興味半分に聞いている好さんにお弁当と箸を渡す。一緒に食べる事を了承した好さんであったが箸が一膳しかなかったのだ。それにこの年になって間接キスぐらいでは対して騒ぎはしない。それは好さんも同じだろう。

一瞬好さんはえっ？という表情になったが直ぐに取り直し私から箸と弁当箱を受取ると、モソモソと食べ始めた。心なしか頬が赤く見えるが恐らく目の錯覚だろう。

「それですね。せつかくなので恋人と答えておきました！」

「……………え？（もく？）」

3

「何でそうゆうことになっているんですか？」私は最大限の怒りの笑みを浮かべながら野々村を睨みつける。

それを受け野々村は視線をそらしながら冷や汗を流していた。隣にいる好さんからわざわざかながらオーラを感じる。……………これは、殺気？

「ええー、何で怒ってるんですか？ 私自分ではそこそこ可愛いと思ってるんですけど 店主さん的にはそんなに私はタブーですか！？」

野々村は本気でうるたえている。どうやらこの事は私に良かれと思っただった行動のようであった。そんな事をされたら迷惑に思うのが当然だと思つのですが私の気のせいでしょうか。それに自分で自分を可愛いと言う事はどうなのだろう……………。

「いや、野々村さんは結構可愛いと思っただね」

「なら良いじゃないですかあー！」

「そついう問題じゃなくてですね。君と私が付き合っていると君に言い寄ってくる男が減ってくるでしょう？」

「それなら問題ないですよ。だってその為に言ったんですもん」

いや、そういう問題でもないんですがね、言い寄ってくる男がないと君に彼氏が出来ないでしょう？私がそういうと野々村はウーと唸って何も言わなくなってしまった。私は何か間違った事を言ったのだろうか。少し考えたが分らなかつた。

野々村は機嫌を悪くするとぷいっと向こう側を向き持つてきていたお弁当を食べる事を再開した。そして、その様子をただならぬ気配をかもし出しながら隣で見っていた好は野々村の側によって行きポン！とその方を叩いた。すると、野々村は涙を流し始める。

「ぶわあああああ〜好ちゃ〜ん」

野々村は持つていた弁当を置きその勢いで好さんに抱きついて泣きはじめた。まあ、涙が本当には出ていないので声だけの嘔泣きなのだが……。好さんも野々村は嘔泣きであると分つていつもポンポンとその頭を撫でる。

「?????」私は終始良く分らない事尽くしだった。

4

野々村も泣き止み昼食の時間も終わったので本来野々村の役割である、妙前のマスコットをやらせるべく作業着へと着替えさせる。ちなみに好はまだ残っている。

「じゃあ、着替え終わったら表に来てください」

「ういっ」

私は乙女の着替えをまさか覗き見るわけにもいかないのでさっさとお弁当を片付けると、仕事場へと向かうことにした。妙前はこれから勝負であるが野々村が来てくれるのなら今より早く終わるだろうと言つ希望的観測を残して……。

妙前のとある一室……。と言つても、いわゆる奥部屋のことであるが、その部屋には二人の美少女がいた。一人はその大きな

めがねが特徴的で、もう一人は床にまでつきそうな長い髪の毛が特徴的だ。そんな二人はその部屋で愚痴を主に野々村がもらしていた。「はあく、私そんなに魅力が無いのかな」野々村は涙目になりながら自分のまったいらな胸を触る。「……………。だけど、世の中にはそういう性癖の人もいるって聞くし」

野々村がポジティブに考えようとしていたが無理のようだった。今までの店主の行動から見て自分は明らかに守備範囲外だと気づいたからだ。

野々村はそんな中今まで自分を慰めてくれていた好を見ていた。何処をと言われたら勿論胸部をだ。好の胸は日本女性の平均バストサイズより少しだけ大きいのだ。

「にくい、私はこの脂肪の塊がにくいわ」そういうと好に近寄りその好の大きな胸を少し乱暴に揉む。たいする好はその行為をただただ優しい眼差しで見ている。

ポンポン。好が慰めるように野々村の頭を軽く叩く、「こんなの入らないわと」しかし、野々村は好の手を払いのける。「はあく、ごめんなさい好ちゃん。よし、店主にほめてもらえるように午後の仕事は頑張るぞー」野々村はそういうといきなり野々村が怒鳴った事で驚いた好をほつたらかし、自分は作業着へと着替え始めた。

私がお昼が終わり、中々来ない野々村にやはり希望的観測は無理のあることだった。と、絶望に打ちひしがれていたとき。店の前に黒く縦長い車が止まった。まさか、ヤバイ職業の方たちかと思いつたがそこから出てきた巨漢を見てその心配は杞憂へと変わった。その車から出てきたノソリとでもいいような擬音を出しそうなその巨体は明らかに周りの風景と一致せずその部分が逸していた。その周りを見ると、今回は山ほどいた護衛の方々は今回、二、三人だけであった。その巨漢は周りの手を借りて立ち上がる。その距離からするとこの店へとたどり着くのもう少しばかり時間がかかりそ

うだ。

と、そこで私の脳内が何故かこの男と野々村を接触させてはいけないという電波を受信した。何故そんなことを思ったのかは分らない、しかしそうしなければならぬ。そう思ったのだ。そう思った私は、一言いいに行こうと奥部屋へと向かった。

私が奥部屋に向かうその途中、野々村は着替え終わり出てくるかと思っただがそんな事も無く奥部屋の扉の前で一回溜息を漏らす。最近溜息をつく回数が多くなった気がする、心労だろうか。この店は発足当初から休みなしで働いていたから何かそろそろ旅行などの計画を立てて臨時休業にしてみるのも良いかもしれないと、無駄な思考をしつつ奥部屋の扉を叩く。

「野々村、今小久保幹事長が見えているので私が呼ぶまでしばらくここにいてください」

ガタツ、私がそう言うのと扉の向こうから何やら動揺した気配がする。そして何者かが扉の方へと近付き……。そういつても近付いてきたのは恐らく野々村だろうが……。扉をトントンと二度叩く。

「分りました。店主さんに呼ばれるまでここにいますね」

野々村は私の言葉に素直に従った。その言葉を聞いて私は何故か安心すると、店で待ち受けているであろう小久保官房長官の相手をするべく気合を入れ店内へと向かった。

私は店内に戻る数歩の間にとある事が引掛かった。

今回野々村が妙に聞き分けが良かったということだ。いつもならこういった面白そうな事には自ら首を突っ込んでくる性質なのに……。

野々村と小久保の間にかあったのだろうか。まさしく見た目は美女と野獣、接点などありそうに見えないのだが。

「とりあえず、今は小久保官房長官をどうにかしなくては……」

・「小久保の情報を探るなど後だ。幸いに常連さんの中に情報をかき集める事に才を持っている子がいる、折り菓子を持っていけば協力してくれるだろう。私はそう思いその事について思考することを放棄した。」

3話

0

.....by??

1

私が店内に戻るとそこには先ほどまで数人いたはずのお客が忽然と全員姿を消しており、そこにいるのは小久保官房長官と数人のSPのみとなっていた。

「ぐふふふふ、すいませんねえ。私のプライベートを迂闊にもらすと大変な事になってしまうので、他の方たちにはお帰り願いました。ああ、心配しなくても大丈夫ですよ私が帰られた人の分も買いますから」

生理的に拒絶感を催す笑いと共にその巨漢、小久保官房長官は言う。私はこの人が苦手だ。最初この店に来たときからこの人のかもし出すオーラや、態度が理由だ。

それを見て私は野々村がこの人を嫌う理由が分ったような気がした。が、野々村は小久保官房長官には未だ出会ったことは無いはずだ。私はその考えを捨てた。

「いつもご贖罪ありがとうございます。小久保官房長官殿」

私はいつもどおり店主とお客という仮面をかぶり接客する。普段の私からは考えられない対応だが、この人相手ではこれが普通となっていた。

「それで、今日はどういったご用件で？」私はなるべく感情を前に出さないようにして尋ねる。

「ああ、いやなに。この店をTVで代替的に宣伝したらどうかと思っただけ。そうすればこの店ももっと客が入るだろう、そうすれば君

の懐も大分暖まるはずだ。どうかね？」

私はその言葉の意味を考える。何かあるのだろうか、私はこの官房長官がただでこのような交渉をするはずが無いそう考えていた。

「ぐふふふふ、そう深く悩まないでくれたまえ。心配はいらない、ただ必要な時になったらちよつとした要求を呑んで欲しいのだ」

「要求？」その不穏な言葉に私は不安を覚える。

「私は今後この地域を新たに開発しようと思っけていてね。その際にここら一带の住人には少しの間出て行ってもらいたいのだが、それには激しい反対意見がでる事が予想されている。そこで君の出番だ、ここら一带の住民達の信頼を得ている君が私の要求を呑みここから出て行けば住民達は渋々ながらここを出て行くだろう。それに君の新しい仕事場の心配も要らない、私は東京のとあるデパートの一角を貸しきる事ができる。そこでこの仕事を続ければ良い。給金もかなりよくなるはずだ」

私はその言葉を聞いて驚愕した。何ということだろう。この男は私をここいら住民の説得のためのだしにしようとしているのだ。そこで私は思い出す。この男が毎回私に多くの金を支払っていた事を……なるほど、あの金は私を落とすための準備金だったというわけか。

しかし、この男は何か勘違いをしている。ここらに住んでいる住民というのはほとんどがこの常連さんたちで占められていて、何故かこの常連さんたちは不思議なほど実力を持っている。それは武力なり、財力なり、色々な面の事だ。そんな人たちをこの男は私をここから追い出したくらいで説得できると思っているのだろうか。確かに私がここから離れて良い思いをする人は少ないがそれでも遠くに行ってしまうって買いに行くのが面倒だぐらいなものだろう。「官房長官殿お言葉ですが、私がここを退いたくらいではこちらの方たちの追い出す事はできないかと……」それに「それに、私自身ここを出るつもりありませんし、それにここ妙前は今までTVなどの紹介は全て断っておりますので……」私は

ここが大好きだ。いろいろな個性豊かな常連さんたちがいる。そんな面白いところをわざわざ離れようとするだろうか。いや、しない。「ふむ、君は賢い者だと思っていたのだが。残念だ。私はここらで失礼する」

小久保官房長官はいらだった様子で荒々しく立ち上がる。周りにいたSPたちは小久保官房長官がイライラしている事で少々うろたえていた。そして官房長官は何も買うことはせずにノシノシとこの店から出て行ってしまった。

それを私はいつもどおりレジで立ちながら見詰めるだけだった。

私は、小久保官房長官の縦長で黒い車がここから出発したのを確認すると奥部屋にいるマスコットたちを呼びに行こうと思いい奥部屋へと向かった。

2

私は奥部屋の扉を二度叩く。

「小久保官房長官はいきましたので、店内に来て良いですよ」

「ふう、やっと行きましたかー。ありがとうございます店主」

私がそう言うと、扉からは野々村だけが出てきた。彼女はニコニコ顔でこの店の制服を身にまとっている。

ここで、彼女の制服の説明をしておこう。彼女はこの店のマスコットの存在という事もあり。ほかのお店などのようなかしまったような制服ではない。どちらかというと、今の時代のアニメとかでよくあるような可愛らしいものである。以前バイトが受かり、野々村が店番として出ていたとき常連さんにもっと可愛い服にしたほうが良いといわれ彼女に経費で可愛いものを買ってもらった。私には美的センスという物が皆無なので、そこにはノータッチである。そのお蔭か、この店では以前とは違った客層が多く来るようになった。彼女目当てに……。

私は、その部屋には好さんもいたはずなのに野々村しか出てきていないことに気づき部屋の中を見たが誰もいなかった。

「あれ、好さんは？」私は尋ねると

「好ちゃん？ 好ちゃんなら、店主が見せに戻ってから少し経った時だったかな？ 裏口から出て行っちゃたよ。お弁当ありがとだつて」

そうか、好さんはもう言ってしまったのか……。残念だ。ん？伝言を受取ったということは野々村は好さんと言葉を交わしたという事か？なんと羨ましい。好さんは無口で有名なのだが、くう……。野々村は喋ったのか、ちなみに私は彼女とは数えるほどしか喋ったことは無いし、声を聞いたことも数えるほどしか無い。私も彼女の

声を聞きたかったものである。残念だ。

「そうか、残念だ。しかしもう行ってしまったのならしょうがないですね。さあ、仕事を再開しましょう」

私は手をパンパンと二度叩いて野々村を店内に向かわせた。

「ありがとうございますー！！」

店内に明るい野々村の声が響く。野々村のバイト内容は店内をいそいそと歩き回り接客をする事だ。そのため常に笑顔でいることを言いつけている。ただ、野々村の場合はデフォルトで笑顔なので言っても言わなくても同じ事なのだが。

私が店内に目を巡らすと先ほどまで、小久保官房長官のお蔭で人っ子一人いなかったこの店内は野々村が店に出たとたん、満員御礼とはいわないがそれでもそこそこに客が入るようになっていた。

何とはなしに野々村を見る、本当に素敵な笑顔だった。私が少し見ほれてしまうほどに。そういえば、野々村がバイトで店内に入るのは久しぶりだったな。いつもは何故かバイトに来て遊んでいたりとしているのだが。私は雇い主として甘いのだろうか。甘いのか

もしれない。だがそれでもいいと思える。私がこの店主で今の野々村にもたいした不満は無い事だし。野々村が私の視線に気づいたのかこちらを向くと、その笑みを更に数段階レベルアップさせた笑みとなった。……、自分で言っというてなんだが意味が分からない。

今日は小久保官房長官という思いがけないイレギュラーがあったが無事今日の仕事も終盤を迎えてきた。午後八時半ちょっと過ぎ時計を見るといつの間にかこんなに進んだのかと思うほど時間が経っていた。

「もう良い時間ですし、そろそろ切上げますか」

「ふえー、やっとですか！！ 久しぶりに仕事したので疲れましたよー」

先ほどまでバリバリはたらいっていた野々村が言う。

「久しぶりではなく毎日やってくれると助かるんですがね」

「ふへへへへ、すいません。それは無理ですよ。私にもやるべきことという物がありましたえ」

「はあ、では私は暖簾を下げてくるので、片付けをしてくださーい」

「はい」

私はその言葉を聞き、暖簾を下げるために降り口から外へでた。

私は外に出、夜独特のちよつとした冷機が私の肌を撫でる。そのことに私の肌は驚き、その部分は鳥肌立ってしまった。

「ふう、もう夜になるといささか肌寒いですねえ」

私は誰に言うでもなく、その寒さについての感想を言う。道路を見ると、帰宅の時間なので数多くの車の行列が見て取れた。数々のライトが光っているその様はなんとなく神秘的だった。

私は暖簾を下げると店内へと戻った。

「おつかれさまでーす」

私が店内に戻ると、そこには既に仕事着から私服へと戻っている彼女がいた。彼女はいつもどおりの笑顔で私を迎える。そして店内は既に暗くなっていた。彼女が気を利かせて電気を消してくれたのだろう。まあ、一部の電気はついたままだが、これはこうして私と話したりするためだろう。

「ああ、お疲れ。今日は色々大変だったね」

私が言っているのは小久保官房長官の事だ。すると、彼女は少しばかり表情を暗くする。はて、彼女と小久保官房長官の間になにかあるのだろうか。見ていた限りでは何も接点は無いはずだ。

「それで、店主。確か店主の部屋にはテレビとありませんでしたよね」

彼女は私に確認を取ってくるが何なのだろうか。確かに私の部屋にはテレビは無いが。そのせいか、私は世の流行という物に疎い。まあ、それも野々村が来てくれたお蔭で大分改善されてはいるのだが。

ちなみに彼女が何故私の家にテレビが無い事を知っているかという何度か彼女に家を見せて欲しいといわれ連れていった事があるからだ。そのときに何かしら間違いは起きてはいない。

「なら、最近の小久保官房長官に関するニュース知りませんよね？
ニュース？」

「はい、最近テレビをつけると、その事に着いてばかりやっているんですよ……」

全く知らない事だった。

「それによると、最近ですね。女の子、中学生辺りの子供ですかね。その子達の殺害事件が増えているんですよ。しかもその子達は死体解剖の結果全員乱暴をされてから殺されているそうなんです。そしてその犯人がどうやって調べたのか、小久保官房長官なのではないか？って言われてるんです」

それを聞いてみると私の知らないものばかりだった。なるほど、しかしそれならこの子が小久保の目の前に出たくないというのはも

つともだというものだろう。彼女はその年齢に反して容姿が幼いのだ。

「だから、私は彼が来たときは外に出たくないんです」

「なるほど。しかし何故それを私に？ 私は中学生でも、女子でもないのですが」

私がそう尋ねると彼女は顔を赤くして「殺人犯の考えなんて分らないじゃないですか！！ だから、何も知らないで接するよりも知っていたほうがいいと思って……」

どうやら、私を心配しての事のようにだった。しかし、私はそんなに弱そうに見えるだろうか……。 やってみないと分らないが。あの巨体に遅れを取る事はさすがにないと思うのだが。

「なるほど、ありがとうございます。しかし大丈夫ですよ。これでも私は強いですから、もし何かやってきたら逆に返り討ちにしてやりますよ」

私が腕まくりをして力こぶを見せながらさういうと野々村はキョトンとした表情になりさうですね。と言った。するといつもの野々村に戻ったように感じた。シリアスな野々村というのはらしくない。「だから、もう帰って大丈夫ですよ」私はさう言つと、仕事を終える後片付けをするために奥の部屋へと消えた。

「まあ、それももうそろそろの辛抱なんですけどねー」

だから、私がいなくなつた店内で野々村が何と言つたところで私気付くはずも無かつた。

3

「どついつ事なんだ！ー」

私は今日の前にあるパソコンのディスプレイに写っているとある事実には驚き叫んでいた。

私が今いる場所。それはこの町の一角にあるインターネットカフェだ。昨日、野々村から聞いた小久保官房長官の話に興味を持った私は、ここに調べにきたのだ。

私の家にはアナログな物、そして生活するための最低限しかないため、良く野々村などに電気物に弱いと思われるが、そんな事は無かった……いや、そんなことはどうでも良い。いまそんな事は関係ないはずだ。そういえば今日は休日だったなだとか、店を臨時に閉めてきたなんて事はどうでもいい。

今私の目に映っている事実。その事実は明らかに私の想像の範疇を超えていた。

『小久保官房長官 銃殺！！ 犯人の正体は？』

昨日会った。人物が殺されている。そういえば、今朝からパトカーの音がうるさかったかもしれない。そんな事に今更気づく。

私はこの事実に驚愕しながらもその記事の詳細に目を通した。

『昨夜、零時ごろ未明京都府 町の 公園付近にて、小久保官房長官の死体が発見された。警察の司法解剖によると、頭に一発銃弾を受けた後があるとの事。それが致命傷となったようだ。警察は最近小久保官房長官にかかっている少女暴行殺人事件の関係者が私怨で殺したのではないか、との見解を示している』

私が昨日小久保官房長官と分られたときは九時に近かったはず。それから、約三時間の間に何があったのだろうか。私は、目を見開きながらそのページから一編たりとも情報を逃さないようにと睨み続けていた。

そんな時。

pllllll、pllllllll。私の携帯電話が音楽を鳴らす。

この音楽は着信のときの場合だ。誰だ？

私は、ポケットから携帯電話を取り出し、相手を確認する。野々村だった。恐らく、今日の前で開いている、この小久保官房長官の事件についてだろう。

「もしもし。ええ、小久保さんの事件ですか？ 知ってます。はい、いいですよ……。」

予想通り、野々村は私に小久保官房長官についてのことを知らせようと思っていたようだ。そして、私達が関係者として疑われる可能性があるかもしれないから、一緒にいようと言われたのだ。言われてみればそうかもしれない。こういう場合付き合いがあつた人を疑うのが定石だと思う。いや、警察の取り調べ方など知らないが。ただ、私は銃など持っていないのでそんなに心配する必要も内規がするのだが……。野々村も、持っていないだろう。

故に、一緒にいなくてもいい気がするのだが。まあ、気分の問題なのだろう。

待ち合わせる場所は、どうやら私の家にするらしかった。その際、夕食も作ってくれるらしい。今から楽しみである。私はインターネッツトカフェを後にした。

私ที่บ้านに着き待つこと数十分。外から少し大きい音の靴音が聞こえてくる。この感じは恐らく野々村だろう。ようやく来てくれたようだ。

「こんにちはわー！！、はいはいすいませんねー」

彼女はドアをノックせずに開け入ってくると言う。そして、私を確認すると、足でどけるように私をのけると慣れたように台所まで行くと持っていた、スーパー袋をドサドサとおろし、この部屋にある小さな冷蔵庫に入れ始める。

「ん？ カレーかな」

「んー、そうよー」

私は彼女が袋から出し入れしている買って来た物を見て適当にあたりをつけるかどうかやら当たりのようだった。

「それにしても驚いちゃったよー。まさか、小久保官房長官死んじやうなんて」

「ええ、私も先ほどまで、ネカフェで、パソコンいじってたので偶然知ったという感じなのですが驚きました」

「まあ、それもただよー。野々村的には、店主がパソコンを使ったことにも驚きましたよ」

彼女はそう言うと、私の向かい部屋の端に積んである座布団を持ってきて座る。彼女を出迎えたために立っていた私は、同時に先ほどまで座っていた座布団に座る。

「馬鹿にしないでください。私だってパソコンくらいは使えます」

「えへへー、ごめんね。でもこんな部屋じゃそう思われても仕方ないと思うなー」

彼女は周りを見渡す。見事に何も無い。生活雑貨等はあるのだが何処にでもありそうなテレビは無い。ついでにラジオも無い。更には新聞も取っていないかった。

……。しょうがないのか。

「それにしても、店主的には今回の件どう思われますー？」

野々村は台所に立ち、慣れた手つきで野菜を刻みながら私に尋ねる。本当に慣れた手つきだ。これから、お菓子作りの方も手伝ってもらおうか、と考えてしまいそうになるくらいには。

「そうですね。個人的にはもう胃に穴が開く思いをしなくてすむので、ありがたいですが。店的に考えますと、やはりビッグゲストの消失は痛いですね。お客あつての店といえますか」

「そっかー。店主さん現実的だなー。私的には女性の敵が消えたっ感じなので逆にせいせいですよ。あの人近くにあった日には危なくて夜道を歩けませんからね」

あははー。と笑いながらいう野々村。たしかにそうかもしれない

な。いや、死者相手にひどい話だが。

「しかし、せいせいするとは貴女も酷い方ですね。お得意様がお亡くなりになられてしまったのに……」

「それは、しょうがないでしょ？ あんな噂が流れてる人が近くにいちやね。それに私は店主とは違って可愛らしい女の子ですから」
そう言っただけは先ほどまで刻んでいたものを全て、鍋へといれていく。まだルーは入っていないのであの独特の香りはまだ漂ってはいない。

「しかし、それも噂でしょう？」私はそう返すが「でも言うじゃない？ 火の無い所に煙は立たないって」こつ切り替えされてしまった。「たしかにそうですね」

「だからね。あの人についてはこんな感じな評価で良いと思うんだよね。店主もさ、お得意様なんて山ほどいるじゃない？ 好ちゃんだってそうだし。デリバリーしか頼まない情報屋さんしかりさ。だから、今は胃の痛くなる懸念がなくなっただけで思っておけば良いんじゃないかな？」

彼女はそういって私の方を向き微笑む。そうだな。どうでもいいのか。あの人が消えた所で妙前は何も変わらない。以前の妙前に戻るだけだ。私はその事についてはもう考えない事にした。今はただ彼女が作ってくれるカレーを心待ちにしておこうか。どうやらまだ時間がかかるようだし。一寝入りひても良いかもしれない。

「私はちよつと眠りますね。カレー出来たら起こしてください」

「あいあい」その言葉を聞いた私は座布団を枕代わりにして目を瞑った。

私が目を覚ますともう既に部屋の中は、太陽が沈みかけているのだろうオレンジ色で染まっていた。

身体を起こし、野々村を探そうと視線を動かすと、私の側に丸いちゃぶ台が置かれており、私のいる位置とは正反対の場所に野々村は携帯をいじりながら座っていた。

「あつ、店主さん起きたの。うん、カレーが出来上がるまでもうちょっと時間がかかるなあ……」

「おはようございます」

そう言われ私は鼻を動かすと確かにカレーの匂いが漂っていた。そして私はお腹が空いている事を知覚する。

はあ、早く出来ないものか……

十数分後。

「店主やつとできましたよ」

野々村は先ほどまでいじっていた携帯を見ながら言う。どうやら、携帯の時計で時間を見ていたようだった。私はそれを見て、この部屋にある時計を見れば良いのでは、と思ったが、先ほどまで私は寝ていたのだった。という事を思い出して半分申し訳ない気分になった。話し相手がおらず、ただ時間を待つしかないということは結構苦痛である。

しかし、私は最近の若者は携帯が手放せないと、聞いたことがあったので、たとえ私が起きていても携帯を見ていたのかなとも思う。

「おお、やつとですか腹ペコですよ」私はお腹を撫でながら言う。

腹と背がくつつくほどではないが空腹を感じていたのは確かである。

「はいはい、じゃ。よそつてきちやいますから。少しだけ待っていてくださいね」

と、野々村は私を小さい子供を相手するときのように言う。そのことで私は少しムツとしたが、今の状況を思い返すと、そう思われなくても仕方が無い事に気付いた。

しょうがない、手を洗ってくるか……。

私は手を洗うために席を立った。そのまま洗面所へと向かう。蛇口をひねり水をだしてその中に手を突っ込む。冷たい。この冷たさが私を少し引き締めてくれるようだった。

ふと、私はその時鏡をみると先ほどまで眠っていたせいか、若干髪の毛が跳ね、顔を見ると今寝起きという事が分るような顔になっていた。

恥ずかしいな。顔も洗っておこう。
ついでに顔も洗うことにした。

私が、すっきりした顔でリビングといえるべき場所へともどると既にそこには私の分と野々村の分のカレーが配膳し終えていた。

「あつ、用意しておいたよ店主さん」

「ありがとう。じゃ、食べようか」

私は、先ほどまで寝ていた場所に枕代わりに使っていた座布団を置いて座り、手を合わせる。野々村もそれに気付き私と同じく手を合わせる。

「「いただきます」」

私はそう言うと、置いてあったスプーンを手に取りカレーを口の中に運ぶ。

うん。うまい。カレーのあの独特の辛味が口の中に広がる。

「中辛？」私はなんとなく尋ねる。

「そうですね。私あんまり刺激物好きじゃないですから」彼女はそういうとまた一口カレーを掬う。

「そうですね。私も辛いのは嫌いじゃないですが、この位がちょうど良いですね」

「ところで味の方はどうですかね？ 味見もしたから多分まずいって事はないと思うんですけど」

私はそう言われてそういえば味の感想を言ってなかったなと気付く、普通は味の感想を言うものだと思う。

「おいしいですよ・じゃがいもとかも難くないですし」

「ほんとうですか！？ うれしいです！！」

私がそうお礼をすると、彼女は笑顔になり言う。

そして私と彼女二人はそこそこ雑談を交えながらカレーを食べる。

めていった。

「ふう、おいしかった」彼女は、すこし後にのけぞりながら言う。そして食べた事でお腹が少し張っているのかお腹を撫で付けている。「じゃあ、私がお皿を洗いますからゆっくりしててください」

「お願いしまーす」

先にカレーを食べ終えていた私は彼女のお皿を私のお皿に重ね、皿を洗うために立ち上がる。我が家はリビングとキッチンが繋がっている所以对して移動する事はないのだけれど。

「そういえば、明日、妙前に警察の方とか来そうですねー」

お皿を洗っている私に野々村が話しかける、野々村は眠いのかちやぶ台にもたれかかりぐだーっと溶けている。

「そうですね。来るかもしれませぬ。そこそこ常連だったわけですからね」

「店主、もし私が捕まっちゃったらちゃんと助けてくださいよ」

何を言っているのだろうか。私達はテレビで言っている小久保官房長官の死亡推定時刻には二人とも店で仕事をしていたはずだ。捕まるはずは無い。もしかしたら冤罪で捕まった場合だろうか……。

「まあ、捕まるなんて事はありませんとは思いますがね」

それから私達は他愛の無い話をし、時計を見ると良い時間だったの野々村は家へと帰宅した。

私は後にこのことを深く後悔することになる、何故彼女をこの時呼び止めなかったのか。

後悔の念はいつになっても消えはしない。

4

野々村が私の家にカレーを作りに来てから早一週間という時間が過ぎ去っていた。

そして、私は五日前から新聞をとり始めている。

私は少し前に起こった小久保官房長官についての情報が無いかと躍起になって新聞から情報を得ている。勿論近所にあるネカフェにも通い新聞では分りにくい状況などを手に入れている。

私は本来なら、このような小久保官房長官が殺された事件、そしてその詳しい情報などどうでも良かった。そうどうでも良かったのだ。

しかし、そう言っていられないのが今の状況だ。

時間で言うとちょうど六日前、野々村が私のところにカレーを作りに来た次の日のことである。私はその日バイトに来なかった野々村のことを恨みながら仕事をし、休憩時間となったとき私はふと携帯を見た。すると、そこには一通のメールが届いていて。宛名は野々村だった。私はバイトにも来ずになに暢気にメールを送っているのかと思つてそのメールを見てみると。

『店主さん！ どうしよう！ 家に警察が来てこの間の事件の犯人が私だつて！！』

そんな内容が短い文で書かれていた。私はその事に珍しく動揺し、どうすれば良いのか少しの間あたふたしていたのだが、少ししたら警察へ行き私がその時の状況を説明すればよいという考えにやつとの事行き着いた。

私は急いで着替え財布を手にとると、店の表へと出て暖簾のれんくをさげる。今日はもう店じまいだ。いまから警察署へと行かなくてはならない。

確か、警察署へと行くにはここから二駅ほど移動しなくてはならなかったはずだ。私は駆け足に駅へと向かった。

私は今疲れている。これほどまでの疲れを今までに感じた事は無い。それほどまでに疲れきっていた。店内にぽつんと置いてある椅子に腰掛けながら今の状況に打ちひしがれていた。

今私は既に警察所へと行き、野々村の罪が冤罪だという事を主張してきた所である。私の疲れの原因はそこにある。その一部をダイジェストにして少し話そう。

私が、警察署へと付き。野々村のバイト先のオーナーという事で会おうとしていたのだが、まずここでストップが掛けられた。小久保官房長官殺人事件の第一容疑者に無駄な知識を植え込まないために気安く面会をしてはいけないのだそうだ。

そこで躓くとは思わなかった私はその受付にいた女性の方に私の身の上を説明すること数十分ようやくの事で、面会の許可を短い時間だが貰う事ができた。

そして私は良くドラマなどで見かけるような留置所へと連れて行かれ、待っている。囚人服たじゅうかを着た野々村が向こう側から、女性の府警に連れてこられた。

野々村は私の姿を確認すると、いきなり窓へと駆け寄り涙を流し堰をきるように話始めた。

「店主さん！！ どうして？ どうして私は捕まってるの？ 分らないよう」

涙を零し乱れる野々村、今おかれている状況の意味が分からないのだろう。何故自分が捕まったかのその意味が。

「安心してください。大丈夫です、貴女が無実である事は私が知っています。貴女を絶対にそこから救って見せます。任せてください」
私は彼女を安心させるようにと、言葉を語りかける。

私はその時若干の怒りを覚えていた。私が知っている野々村はこんな悲しい顔をすることは無かったのだ。いつも笑っていて。気さくで。少なくともこんなマイナスな表情は見たことが無かった。そしてそんな明るかった彼女に暗さを覚えさせたこの忌々しい事件に對してかなり腹が立っていた。

「お願いします、お願いします、お願いします。私がいくら、あの時はバイトをしていたと話しても信じてくれないんです。お願いし

4話

0

ふふっ、店主さんの一日げつとー by???

1

ファミリーなんて言葉がある。それは皆様知っている通り家族という意味で、英語で表記するなら familyだ。カタカナならファミリーで、日本語で言うなら家族。まあ、そんな事は同でもよくて私が言いたい事は、その家族は必ずしも、血が繋がっている必要がある。という訳ではない、ある程度親しくなり、親類と同じように遠慮なく何でもしあえる関係がすべからくファミリーと呼べるそう私は思う。

今回連絡をした相手も似たような間柄だ。今更遠慮をする仲ではないし、今回のこの件彼女以外に適任者はいないだろう。それに、契約という事で彼女にとっても有益がある。いわゆるギブアンドテイクという奴だ。

今回連絡を取った彼女は私の店の常連さんで、いや、正確にはそうでも無いかもしれない。彼女はどこからこの妙前の噂を聞きつけ直接電話でデリバリーを頼んできたのだった。その時は驚いたものだ。私は当然のことながらデリバリーなどした事も無く、その時野々村もいたのだが店を野々村だけに任せて外へ出て行く事にはいささか心配だったので断ろうと思ったのだがその時に提示された代金に目がくらみ最終的に野々村に店を任せてはじめてのデリバリーという物を体験する事となった。

そして、その時彼女の家へと当然のことながら行ったのだが、そこがまた凄かった。どんな人が住んでいるのかと思えるほどの豪邸だったのだ。

女が出来る事が人並みと叫びたら私達凡人のやる事など何もやつてないに等しいではないか「それに、私だつて中々相手にしたくない人種っていうのはいるしね。今回の相手はそんな人」

「で、誰なんですか？ その人って……」

「んー。私的には店主さんはその存在は知らないほうが良いと思う。今回電話したのは調べ終えたよつていう報告だけ。ここから先も私に任せておいてくれてかまわないから」

「分かりました。まかせます」私はそう言つと、携帯電話の電源を切つた。

そうして、私は再びこの空虚な空間へと戻る。野々村一人だけがいなくなり、一番初め、開店当初のときに戻つたかのようなこの店は野々村がいなければかなり寂しいものになっているのだということに気がついた。そうして、私は野々村の大切さを身にしてみた。

私はふと、立ち上がりいつもお菓子を作っている奥へと向かう。電気をつけ見渡すと、いつもいつもちよつと狭いな。ぐらゐに感じていたこの部屋が不思議に広く感じられた。

私はそこにある台を撫でながら歩いてみると、ふいに、トントンというノックをするような音が入り口の方向から聞こえた。

私は不思議に思つて、早足で入り口の所に行くと、そこにはいつものギターケースを背負つた。好さんがいた。その長い黒髪はポニテールにまとめ上げられている。

「どうしたんですか？ 好さん。すいません、今日は営業していません……」

私がそう言つと、フルフルと首を振つた。そして、私を無視して店の中に入つてきた。

「店主さん。のちゃんいなくて寂しい。だから、来た。私お菓子好き。だから、おしえて？」

好さんはそういうと何処から取り出したのかエプロンをその身に

まとった。そのエプロンはピンク色でうさぎのワンポイントが刺繍されていた。よく似合っている。

「そうですか。お菓子を作るのは楽しいですからね。分りました。奥までできてください」

私はそう言っただけで先ほどまでいたキッチンまで戻っていく。その後を好さんがひよこひよここと着いてきている。

いつもの私なら、好さんが喋ったという事実には驚き、気分を上げていただろう。しかし、今はそれどころでは無かった。

野々村がこの店にいないという事実はそこまで私に重くのしかかっていたのだった。

2

私はキッチンへと着き、今私の隣で好さんが一生懸命お菓子を作っている。作っている物は好さんのリクエストでマドレーヌである。

この店の名前は『妙前』といかにも和風くさいのであるが、実は洋菓子も扱っているのである。若い客層を狙ったのだ。

私の教え方はそれほど上手いとは思えないのだが、好さんの腕がいいのだろうか。私が隣でやり方を教えながらやっているのだが着々と完成に近付いていっている。以前料理等を習っていた事があるのかと思ったがどうやら無いらしい。これがいわゆる才能だろうか。彼女の仕事は何なのか未だ知らないけれど。彼女のこの才能を活かせる所で働いて欲しい。

私がそう思っているともうあつという間に焼き上げるのみとなつたようだった。

彼女と二人、マドレーヌが焼きあがるのを椅子に座りながら待つ。その間彼女の無口という属性も手伝って全く会話が弾まない。それに私自身今明るい話を降ろうとしてもどっからどうみてもやせ我慢にしか見えない。

私はじつと黙りながら彼女の座っている椅子の足の辺りを見詰めていた。

彼女はそわそわとせわしなく動いている。そして、時折私の方を見てくることから、私を気にしてくれている事は分かるのだが逆に私が彼女に話しかけてあげることが出来ないという悪循環だった。

そして私の方を見つつもオーブンの方へ目が行っている事から今焼いているマドレーヌの事が気になっているのかなあ、と思う。

そして、しばらく経つと良い香りがこの部屋いっぱい立ち込めてきたどうやら出来上がったようだ。

私は立ち上がった、焼きあがったマドレーヌを取り出す。好さんはまるで珍しいものを目の前にした子供のような目でその取り出したマドレーヌを見ていた。

その焼きあがっていたマドレーヌそして、今の好さんを見てバイトに入った当初の野々村の事を思い出していた。

あの時もどうしてか、いきなり野々村がマドレーヌを作って見せてくださいなんていうので作ったのだ。そしてその時の野々村も今の好さんと同じような表情をしていた。

その野々村も今どうしているだろうか、先ほどあった野々村の姿が思い起こされる。笑顔で溢れていた野々村が泣き叫んでいた姿。

そんな事を考えていたら再び警察にたいする憎しみがよみがえってきた。自然と手に力が入ってしまう。

「え？」

すると、その手にかぶせてきた手があった。私は驚いてその方向くと、そこにいたのは野々村ではなく、好さんで好さんは、優しく私の手を撫でていた。私の手は撫でられたことによって、力が抜けていっていた。

「好、店主さんが今悲しいのは分かる。けど怖い顔しちゃ駄目。のちゃん。店主さんの優しい顔が好きだって言ってた」

そうか、野々村はそんな事を言っていたのか。

「ありがとうございます。好さん。少し気がたっていたみたいですが、けれど、この思いを消す事ができない。どうしてもできない。私は人が絶望する顔を始めてあの時見てしまったのだ。そう簡単に割り切れるものではない。」

野々村が帰ってきてから私も私はこの思いと付き合うことになるだろう。

私達はマドレーヌを取り出すと。その場で頂く事にした。私はせっかくなで始めて作ったのだろうから家に持って帰ったほうが良いのでは？と提案したのだが、好さん曰く一緒に食べたほうがおいしいのだそうだ。

マドレーヌを手に取り、口にするとやはり出来上がりだという事もあり暖かかったが、その暖かさが心にしみた。

「おいしい」

「そうですねおいしいです」

そして、始めて作ったとは思えないほどのおいしさ。好さんも満足がいつているようだ。

一つのマドレーヌが食べ終わり、少し喉が渴いたので好さんと自分の分二つ分の紅茶を入れ飲んでいた。

「好。今日、店主さんの家に泊まるうと思つ」

私はそれを聞いて思わず口に含んでいた、紅茶を噴出しそうになった。

「こ、好さん。そこまでしていただかなくても大丈夫ですから」私はすこし咳き込みながら言う。

「でも、好のばあば言った。嫌な事があつたら、誰かと一緒にいたほうが良いつて」

コクコクと紅茶を飲む好さんの姿にようやく癒しを感じ取る事ができた。すこし心が落ち着いてきたのだろうか。

「いえ、しかし。私にもですね……」

「それに、好。今日泊まるホテル取つてない」

それを聞いて私は時間が止まったと感じた。いや、好さん。ホテル暮らしたったのか。とか色々驚くべき事はあったのだが。

私は、好さんが私の家に泊まるという暴挙を止めるべく様々なことを考えたが、今日泊まるところが無いらしい好さんをほったらかす事など出来なかった。

「はあ、いいですよ。分かりました」

3

私の家には今、好さんが来ている。その後、好さんは自分が今日の夕食を作ると言い出し、近所のスーパーで買い物してから私の家に来たのである。この家に野々村以外で女性が来る事など初めてではないだろうか。

そしてその彼女は今、お風呂に入っている。妙前に来たときどうやら仕事が終わって直ぐに来たようで、仕事の汗を流したいのだそう。

この狭い部屋にシャワーの音が響いている。私は年柄もなくてときどきしながら本を読んでいた。

シャワーの音をBGMにしながら本を読むこと数分間。ようやく好さんが上がったようだった。脱衣所と部屋が一応分かれて良かったと思う。

「ん、シャワーありがと」

そうして、拭き終わり着替えも終わった彼女は出てくると先ほど買ってきたものを出して料理を作り始める。

出されたものは、ひき肉、パン粉、たまねぎ、卵である。どこからどう見てもハンバーグの材料だ。好さんの大好物らしい。他にもからあげやカレー等が好きらしいことから意外と味覚が子供のようだった。

好さんは、たまねぎを置いて切り出す。こういった料理も初挑戦であるらしい。

「好さんって、こういうハンバーグの作り方とか何処で知ったんですか？」私は多少の興味と供に聞いてみる

「テレビ」そう言った好さんは持っている包丁に全神経を注いでいるようだった。そして綺麗にみじん切りにしていく。このみじん切りのやり方もテレビで学んだのだろうか。

そして、ある程度まで、たまねぎを切っていると突然に好さんの包丁の手が止まった。

私はそのとき好さんの包丁のリズムを聞きながらまた本を呼んでいた。

「どうしたんですか？ 好さん」

「何か、目が痛くて……」

そういいながら目をこする好さん。もしかしてたまねぎを切ると目が痛くなるという事を知らなかったのだろうか。知らなかったのだろう。実際にこうしてたまねぎを触っていた手で目をこすっているのだから。

「ああ、好さん。たまねぎって切ると目が痛くなるんですよ。それで、そのたまねぎを切った手で目をこするとですね、余計に痛くなるので……」

「どうすれば良いの？」

そう首をかしげながら聞く彼女に私は答えることが出来なかった。良かったたまねぎを一回噛めばいいなど聞くが果たしてたまねぎを切った手で目をこすっていて効果があるのか。

「私がやりますので、包丁を貸してください」

私はそういい読んでいた本を置いて、彼女から包丁を受取るようにするが離さなかった。不思議に思って彼女を見る。

「今日は好が店主さんのお夕飯を作る」

なるほど、自分で作りたいという事が。涙目で言う好さんを見て思う。

「なら、玉ねぎだけは私に任せてください。目が痛いでしょう？手を洗ってタオルでも当ててくださいな。その他は好さんに任せ

ます」

そういうと、好さんは渋々といった感じに私に包丁を渡してくれました。

そして、やはり目がかなりしみていたのか、すばやく手を洗うと目にタオルを当てていた。

私はそれを見ると手早く玉ねぎをみじん切りにする。それを傍目から見ている好さんはなにやら悔しそうな目をしていた。

当然の話だが、テレビ等では玉ねぎを切れば目が痛くなるなど当然なのでそんな事を言う事は無い。

好さんには次のときに期待しようか。

あの後、好さんが復活するのにはしばらく時間がかかった。それからは、案外あっさりとはンバーグは作りあがってしまった。

今私達二人は小さなちゃぶ台を出し、二人で並んでいる。この前は野々村と一緒に食べたのだがその野々村も今はいない。

私は、手を合わせる。そして、それを見た好さんも私がやることの意図を察して手を合わせた。私はそれを見ると音頭をとる。

「いただきます」

「「いただきます」」

私は最初に彼女の作ってくれたハンバーグに手を伸ばす。ちょうど良く作られたそれを割ると仲から肉汁が漏れ出して食欲をそそった。

彼女は私がハンバーグに手を伸ばしたのを見て体をビクツとさせる。上手く作れているか心配なのだろうか。私が端から見ている限りでは変な作り方をしていなかったので大丈夫だとは思いが。

私はその割ったハンバーグを掴み口へと運ぶ。ちなみにかかっているソースは売っている奴である。以前野々村が買ったのが残っていたので、それを使った。

「うん。おいしいですよ」

私がそういうと好さんは嬉しそうな顔をする。そして彼女も同じように食べる。

「確かに、おいしい、かも」

そういつて微笑む彼女だった。

夕食を終えた後私達は特に何をする事も無く。私はお風呂へと入った。お風呂でも好さんが乱入するなどのハプニング等は特に無く後は寝るだけといった感じだ。

そして時計を見てもまだ寝るには早い時間で、本を読むしか時間つぶしの方法は無かった。その間好さんは一人何を考えているのか私の方を見ているだけだった。

かくして、就寝するには丁度良い時間となる。

「そろそろ、寝ますか？」私は好さんに尋ねる。

この部屋には勿論のことだが、寝る毛布などは一組しかない。なのでどちらかは座布団を使って寝る事になる。私としては好さんは女性であるので、布団を使って欲しいのだが、この布団は普段私が使っているものでもあるので嫌がらないだろうか、という懸念がある。

「寝るところなんですけど私の家には布団が一組しかないのですが、嫌でなかったら好さんが使ってください」

私は提案するが好さんは首をフルフルと降る。

「布団ないと風引いちゃう。一緒に寝る」

私はこの提案に驚いた。いや、今日は驚いてばかりなのでそんな衝撃は無いのであったが。とにかく驚いた。普通の女性は好きでもない男性と一緒に寝るといふ事に対して、普通は嫌悪感を催すのではないだろうか。まあ、私の布団を使うしかないという時点で今更な感じなのだが……。それに、私が好さんと一緒に寝るといふ状況に耐えられるかどうか疑問である。主に理性が

「それとも、店主さん。好と一緒に寝るの嫌？」

そう若干涙目になりながら首をコテンと傾ける好さん。それを見て私は、ああ、こんな表情をされては断れるわけが無いじゃないですか。など思っていた。

そして、私は布団を用意して好さんと寄り添うようにして眠っていた。お互いに背を向け合っている。私がさすがに向き合って寝るのはまずいと、説得した結果だ。

ボーっとしながら何を見るでもなく前を見ていた私だったが、今日はいつもと比べて窓から差し込んでくる月光がとりわけ強いように感じた。

直ぐ後には、好さんのぬくもりがある。もう寝てしまったのだろうか。既に好さんの呼吸は整っていた。

私も既に好さんは眠ってしまったのだろうと思い瞼を下ろしていた。思い返せば今日は色々な事があった。野々村が捕まったという悪い知らせから始まり。好さんがお菓子作りにきたり（好さんのマドレーヌは私の部屋の冷蔵庫に入っている）、私の家にお泊りしてきたり。今日だけでどれほど密度の濃い一日を送ったのだろうか。素肌に感じられる毛布の感触がいやに心地良い。

そこで私は背中を触れられている事に気がついた。

「どうしたんですか？ 好さん」私は尋ねる。先ほどまで目を瞑り、今日の事を思い返していたせいかな。かなり眠くなっていた。いや、恐らく精神的に疲れているのが一番の要因だろうけど。

「ん。店主さん。大丈夫そうだなって」そこで一呼吸いれる好さん。今日の私はそんなに大丈夫じゃなさそうに見えたのだろうか。「今日来たのは心配だったから。でも、実際店主さん見てもっと心配になった。ほおって置いたら死んでしまうんじゃないかと思った」

そこまで、だったのだろうか。いや、実際それほどだったのだろう。私の知り合いにこういった事に強いのがいたお蔭で野々村は助かるのだが、もし、そういった知り合いがいなかったら、私は狂ってしまったかもしれない。野々村の帰りを待つといっても、官房長

官を殺した罪だ。果てしなく重い、恐らく一生日の目を見ることは出来ないと思う。

そう考えると彼女がいてくれた事はありがたかった。人との温もりがあることによって安心ができる。もちろん情報屋もだ。

後ろで、好さんがもぞもぞと動いている。そして、私の背中にピトツとくつついた。

「ちよっ、」私はその事に驚き声をあげ、後ろを振り向こうとしたが好みさんの力が不自然に強く振り向く事が出来なかった。

「好。店主さん死んじゃうの嫌だった。店主さんの事好きだから……」

瞬間、時間が止まったような感じがした。好さんからの突然の告白。いつもなら嬉しいと感じ、いち早くこれに返事をするはずだ。しかし、私の心で何かが返事をする事にストップをかけていた。

どう答えれば良いのだろうか。私は今まで生きてきた中で告白をいうものを受けた事が無い。つまりこういつたときどうやって答えれば良いのか分からなかった。

そうして、どのくらいの時間がたったのだろうか。

「すう……。すう……」

後ろから、可愛らしい寝息が聞こえてきた。好さんの寝息だ。

「私はどう答えれば良いのでしょうか」

私はその事をしばらくの間考え続けていた。

4

次の日の話だ。私が朝目を覚ますと、何時々に出て行ったのか後ろで寝ていたはずの好さんは既にいなくなっていた。その事にあわてた私だったが、台所に書き置き置いてあることに気がついた。

『早くに起きちゃったので、帰ります』

何という簡潔な理由だろうか。それを見た私はしばらく玄関にある扉を見続けていた。

今日は、情報屋の話しが正しければ、今回の事件の真犯人が見つかるといった話であった。それはつまり、あの場所から野々村を助けてあげる事ができるという事でもある。……今度の情報屋との約束の時、色々とお菓子を持って行ってやろう。

私は今、朝食を食べていた。今日の朝食は、軽めにパンとコーヒーだけである。特に意味は無かったが早く食べ終わり、近くのコンビニによって新聞が見たい、と思ったのである。

私はその後コンビニにより新聞に目を通すと驚愕の事実がつづられていた。詳細は以下の通りである

『小久保官房長官殺害事件真犯人逮捕！！ 犯人は何と横道総理！！ 政界の大スキャンダル。』

事件の顛末は次の通りである、小久保官房長官と、横道総理の間柄がよくない事は最近の国会等でご存知の事であろう。

横道総理の打ちたた政策は、必ずしもと言っても良いほど小久保官房著官により批判を受けていたこと。

それから、どうやら横道総理の娘さんに小久保官房長官は金を握らせ売春をしようとしていた。らしい。

その事を知った横道総理は拳銃をネットから購入。殺害にいたったのである。』

真犯人が総理だったという事は私にとっては驚愕の事実だったが、それも今は関係なかった。今は野々村がこれで帰ってくるという事実だけが重要だった。

しかし、犯人が総理だったという事で納得のいくことがいくつもある。野々村の主張を警察側が聞き入れなかったという奴である。

だが、これなら聞き入れなかったとしてもおかしくはない。この国のトップからの圧力、そして恐らくだが金のやり取りもあったのだらう。

私はその新聞を購入し家へと帰る。そういえば、いつもは山ほどあるはずの新聞は今日に限り少ししかコンビニに置いてなかった。

世間もこのニュースに高い関心があるのだろう。確かにテレビ等で見ればナイスなミドルかもしれないが実際を知らればただの権力と金をかざしたおっさんだった。横道総理は知らないが小久保官房長官は少なくともそうだった。

そういえば、何故横道総理は野々村を犯人の代役として選んだのだろう。と、考えてその問いは直ぐに解決した。

恐らく小久保官房長官をつけていた人がいたのだろう。そして、足しげく私の店に通っている所を発見し、その時にたまたまいたのが野々村だったのだ。

野々村の見た目も美少女と言っても過言ではない。おそらく過去に一回襲われそうになって、そして小久保は諦めきれず野々村のバイト先を探し、そして野々村を発見。そして彼女の事をつまわした。とか適当な動機を作り上げるつもりだったかもしれない。

そして一度捕まえてしまえば、金、とその職権を利用してどうしようかと、有罪を逃れられないようにしたのだろう。

しかし、それももう既に敵わない。情報屋の彼女がいて本当に良かったと思う。

店が見える所まで来ると、なんと電気がついていて。確か鍵はつけたはず。とか、泥棒か？だとかいう考えがめぐりめぐったが、ここであの店の鍵を持っている人物を一人思い出した。それにしても今日のうちに帰ってこれるとは、情報屋アフターケアが良すぎるな。どんな事を要求されるのか、後が恐い。

私は店の扉の前に立ち一呼吸置く、私がここから入ってくるなんてなんとなく新鮮な気持ちだ。そして、扉を開ける。

「いらっしやいませー」

すると、そこにはかつての笑顔で出迎える野々村がいた。留置所

で見たような絶望に染まった顔ではなかった。まあ、その顔は涙で少し赤くなっていたけれど……。

私は野々村の立っている前まで歩いていく。

「おかえり」

「ただいま、店主さん」

蛇足回

「ふふふ、ホント役者だよなー」

ここはどここの誰だか知らぬ、マンションの一室。部屋の中は、そこそこ明るくなっており。所狭しにパソコンやそれに準じた電子機材が散乱している。

その中央に座っているのはこの部屋の王様、いや。女だから女王だろうか……。それもまた否、その中央にいるのは一人の暴君である。

その暴君は一つの映像を見ていた。

「そんな事言わないで」

それに答えるのはその部屋の入り口の付近にいる一人の女性。眼鏡をかけている。

「だって見てほら、このお顔。素敵でしょう？ この顔のためには少しの嘘も仕方ないわ」

「ふう、まっどうでも良いんだけどね」

眼鏡をかけた女性も、その映像を見ている。その映像に写っている男の表情に見ほれているようだ。

そして、その映像も終盤になる頃、荒々しくドアが開けられた。

見ると、足が見えていることからどうやら蹴破ってきたらしい。その衝撃で扉近くにいた女性は少しだけ吹っ飛び地面に臥していた。

「いったーい。まったく誰よって、あー。ちょっとこのマンションの警備は完璧なんじゃなかったの？」

女性はその蹴破って入ってきた。人物をみると、だるそうに暴君に批判を浴びせる。そして立ち上がった。

「あれー、おつかしーなー」

暴君はそう言ってカタカタとパソコンをいじくる。

その間に入ってきた人物は、大股でケーブルだらけのその部屋を歩いていき。眼鏡の女性に銃を突きつける。

「おおー、凄い。全部力づくでぶち壊してきてるよ。無理したねえ」
暴君はそういうがその侵入者は一切表情を変えない。しかし、その服は所々やぶかれ、そして煤がついていた。

「おまえ、店主さんを裏切った？」

その侵入者はここへきて始めて口を開く。そして問われた眼鏡の女性は突きつけられている銃の銃身を掴んで言う。

「裏切る？ 私が店主さんを？ そんな事ありえないわ」声だかに笑う彼女「私はね、店主さんのためには何だってできるの。留置所に入る事だって。演技をする事だってできるのよ。貴女だってそうでしょう？ 店主さんのためなら相手が誰であろうとその引き金を引いたでしょう？ 確かに、店主さんには嫌な思いをさせてしまったかもしれないわ。けどね。それも仕方なかったのよ。店主さんをいじめるゴミを排除するためにはね。そして、店主さんの邪魔をするならあなただって殺せる」

彼女はそういって銃身を掴んでいた手に力を込める。

彼女の狂気差を感じた侵入者は不覚にも今の彼女にわずかばかりの恐怖を感じ少しばかり後ずさりしようとしたが、銃身をつかまれている事によってたいした距離は離れられなかった。

「もう、彼女の狂気は諦めた方がいいですよ。私は諦めました」

そういう暴君の表情にはなんととも言葉に言い表せないような表情をしていた。

それを聞いた狂女は言う。

「そうよ、彼女は賢いわ。私に敵わないと知った途端、急に自分が成り下がると言ったのだから。私には出来ないわ、だって彼への思いが強すぎるもの。彼の一番になれないくらいなら死を選ぶわ」だからと言って狂女は続ける。「貴女も負けを認めて欲しい。私もまだここで死にたくは無いし。あなたに勝ったとしてもこれまでのような生活はもう送れないでしょう？ それは嫌なの。これからあ

あなたには私の友達でいて欲しいわ」

狂女は侵入者に近付いていき、頬を撫でる。

「でも、あなたのその考えは店主さんの害になるかもしれない」

しかし、あくまで闘おうとする侵入者。そんな彼女に狂女は溜息をつく。

「大丈夫よ。言ったでしょう？ 私は演技が上手いの。それに自惚れるつもりではないけれどそこそこ賢いわ。ミスはしない」

「うっ……」

狂女はそう言うと、侵入者の鳩尾に強烈なパンチを食らわせた。

侵入者は自分で下が向けないほどに狂女に接近されており彼女が攻撃するという事が察知できず。まともに受けてしまった。

侵入者はその場に足から崩れるように倒れこんだ。

「まあ、反則くさいけれど、これで私の勝ちとしましょう。あなたの部屋に寝かせておいて貰えたと助かるわ」

狂女は自分が気絶させた侵入者を暴君へと任せてそのマンションを後にした。

ここは、その暴君のマンションから離れた。見晴らしの良い公園。狂女が休憩しているベンチからは先ほどまで自分がいたマンションが良く見える。

そして、そこにいた狂女は今なにやら怪しいスイッチを持ちそれで遊んでいた。先ほどまでいたマンションを見ながら狂氣的な笑みを浮かべていた。

狂女は自分と彼の邪魔をするものは何人として許すつもりは元から無かったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3267z/>

御菓子屋妙前

2011年12月11日10時45分発行